

スポーツボランティアの活動継続要因について

—メガ・スポーツイベントと開催地域のスポーツクラブを事例として—

スポーツクラブマネジメントコース

5022A313-2 鈴木 朋光

研究指導教員:間野 義之 教授

1. 緒言

文部科学省は第2期スポーツ基本計画においてスポーツを「する」「みる」「ささえる」スポーツ参画人口の拡大と、そのための人材育成・場の充実に取り組み、ライフステージに応じたスポーツ活動の推進とその環境整備を行う政策目標を掲げた。

スポーツイベントの運営においてボランティアは欠かせない重要なステークホルダーであり、期待と共に地位・役割を担う存在である。

ラグビーワールドカップ2019日本大会(以下RWC2019)では約13,000名、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会(以下東京2020)では国内外の旅行者に対する観客への案内等を行う都市ボランティアとして約30,000名、競技会場や選手村などの大会関係施設で大会運営を支える大会ボランティアとして約80,000名が活動し大会運営の大きな役割を担い、期待に応えた。ボランティアはイベントの規模や期間に合わせて募集が行われ、抽選によってボランティアが採用される。一方、地域のJリーグクラブにおいてボランティアの活動上の課題として、「活動参加者が一部の登録者に限られている」、「登録者の役割の固定化」、「登録者の高齢化」、「新規の登録者が少ない」が挙げられている。地域に根ざして活動するクラブにとってボランティアの確保はスポーツイベントを円滑に行う上で必要であるとともにコスト軽減のための重要な要素と捉え、クラブの運営上、欠かせない存在となっている。

2. 先行研究

本研究では先行研究を踏襲し、スポーツボランティアを「個人の自由意志に基づき、その知識・技術や時間などを進んで提供し、社会に貢献すること」と定義する。

スポーツボランティアの参加・継続要因に関する先行研究は数多く行われ、それらの研究動向も行われている。国際スポーツイベントの開催を契機に自治体がボランティア文化の定着の担い手となり地域社会に便益をもたらすことを明らかにした研究、スポーツクラブのボラ

ンティアに関する参加動機、継続要因を明らかにする研究、メガ・スポーツイベントにおけるスポーツボランティアが開催を機に展開された活動に関する研究が行われているが、メガ・スポーツイベントのボランティア参加者が、開催地を拠点とするスポーツクラブが立ち上げたボランティア組織で活動することはメガ・スポーツイベントの影響を受け、継続要因であることを明らかにした研究は行われていない。

3. 目的

メガ・スポーツイベント開催後に開催都市に拠点を置くプロスポーツクラブが立ち上げたボランティア組織に着目し、それに参加するボランティアがメガ・スポーツイベントの影響を受け継続要因であるかを明らかにすることとした。

4. 方法

研究対象は静岡に拠点を置くプロラグビークラブ「静岡ブルーレヴズ」とし、クラブが募集し、登録をしている公式ボランティアとした。公式ボランティア参加者を対象にWEBによるアンケート調査を実施した。調査項目の構成は個人的属性、ボランティアの回数、ボランティアを知ったきっかけ、RWC2019、東京2020のボランティア参加経験、ボランティア参加動機項目、活動で得た心情・スポーツの行動項目、活動に対する満足度、今後の参加継続意思とした。分析の手順は個人的属性の集計を行い、特性を把握した。参加動機項目、活動後に得た心情・スポーツの行動項目それぞれで因子分析を行い、因子構造について内的整合性の検討を行った。「活動の満足度」、「今後の活動継続意思」を従属変数とし、確認された因子構造を独立変数とし、個人的属性の性別、年代、ボランティア回数、RWC2019、東京2020でのボランティア参加経験を統制変数として加え、強制投入法により重回帰分析を行なった。本調査の統計解析にはIBM SPSS Statistics28.0を使用した。

5.結果

調査、先行研究と合わせるため、回収したアンケート 103 件より年齢を「40 代」以上と回答した 97 件を抽出し調査対象とした RWC2019 と東京 2020 のボランティア参加経験の平均値を集計し、一元配置分析を行い、その結果、「4 回参加」の回答の中で RWC2019、東京 2020、両大会不参加のグループと RWC2019、東京 2020、両大会参加のグループの間に有意な差がみられた。その他の参加回数では有意な差は見られなかった。

RWC2019、東京 2020 のボランティア参加経験の平均値を集計し、活動に対する満足度は平均値が 1.51 (標準偏差は 0.597) であった。また活動の継続意思については平均値が 1.12 (標準偏差 0.331) であった。その結果、参加動機項目では 3 つの因子構造が確認でき、「レクリエーション」、「自発的な技術発揮」、「社会参加」と命名した。活動後に得た心情・スポーツの行動項目では 3 つの因子構造が確認でき、「ホスピタリティ」、「スポーツの新たな関心」、「見るスポーツへの誘因」と命名した。

「満足度」、「今後の活動継続意思」を従属変数とし、参加動機項目の因子構造、活動で得た心情・スポーツの行動項目の因子構造を独立変数として重回帰分析を行なった結果、「満足度」に与える影響のある因子は、活動で得た心情・スポーツの行動項目の因子構造の「ホスピタリティ」が正の影響を与えることを示し、「今後の活動継続意思」に与える影響のある因子は、活動で得た心情・スポーツの行動項目の因子構造の「ホスピタリティ」が正の影響を与えることを示した。

6.考察

参加者の年代は 40 代以上が 87% を占め、先に行われた RWC2019、東京 2020 と同じ結果が示された。活動を知ったきっかけは依頼や要請を受けず、自ら積極的に活動情報を

得て、申し込み、参加していることが示された。メガ・スポーツイベントのボランティア経験と未経験では地域のスポーツクラブのボランティア参加の平均値において有意な差はほとんど見られない結果となった。これはボランティア活動について自ら積極的に情報収集し、自らの意思で申し込み、参加しているためと推定される。重回帰分析の結果、「満足度」、「参加継続意思」ともに「ホスピタリティ」が正の影響を与える結果となった。ホスピタリティは「他者を受け入れ、その過程で自己が他者により変質する経済活動外の互恵的コミュニケーション」とされ、自らの知識や経験を活かし、チームのために役立つことが「満足度」となり、品格と責任感を持ち合わせて活動する仲間を互いに思いやり、讃え、結束感を得られることが「継続意思」につながったと推定される。

7.結論

本研究の目的は、メガ・スポーツイベント開催後に開催都市に拠点を置くプロスポーツクラブが立ち上げたボランティア組織に着目し、それに参加するボランティアがメガ・スポーツイベントの影響を受け継続要因であるかを明らかにすることであった。

本研究では RWC2019、東京 2020 でのボランティア経験が開催地域のスポーツクラブのボランティア継続に影響を与えることは明らかにされなかった。ボランティア継続に与える影響として参加する動機において「ホスピタリティ」を満たすことが「満足度」に影響を与え、「ホスピタリティ」を満たすことが「今後の活動参加意思」に影響を与えることが明らかになった。

本研究は限定的な場所とスポーツクラブに焦点をあて、東京 2020 終了から 1 年 2 ヶ月後に行なったため、メガ・スポーツイベントがもたらす地域スポーツにおけるボランティア継続要因については今後更なる探究が必要であると考えられる。